

# 天草版平家物語と平家正節の t 入声

犬 飼 隆

## 0.

キリシタン資料は中世末期に来日した宣教師たちの日本語教科書として編まれた。その素材の一つとして平家物語が取り上げられた理由を推測すると、説教の場などを想定した一対多の語りの言語を習得するためではなかったかと思う。天草版平家物語は二人の問答で始まるが、記述の多くを占めているのは喜一検校によるレシテーションである。本稿は、説教の場を想定したことが語形の選択にあらわれている可能性を指摘する。具体的には、西暦 1600 年前後の日本語において、漢語末尾の t 入声が保存形と開音節化形との両方に実現可能であった環境で t 入声保存の語形を選んでいること、それはやや上品な口調で会衆に語りかける文体の一部をなしていること、そしてその基盤は当時も行われていた平曲の語りの芸能において用いられる発声法であったことを述べる。

漢語の t 入声を取りあげるのは、入声音のなかでこの時代まで保たれ、後には謡曲や平曲において「ノム」という特殊な発声法が成立したからである。本稿ではサンプル調査として「別」「仏」を要素とする語彙の t 入声を取りあげる。帰納された結論の有効性はその限りにとどまっている。この語彙をサンプルとして選んだ理由は、「別」は「別して」のような機能語としても用いられ、「仏」は具体名詞であり、とくに平家物語ではキーワードの一つであるので、用例に違いが出ることを期待したのである。後に述べる通り、実際にそうであった。

## 1-1. 日葡辞書の「別」語彙

キリシタン資料における一般的な状態を知るために、日葡辞書の「別」を要素とする語彙の語形を悉皆調査した。日葡辞書の t 入声の状況については、すでに柳田 1993 に語彙全体の悉皆調査が示されている。本稿の調査結果はその範囲を出ない。ただし、結

果を整理する観点が異なる。柳田 1993 は入声音のなかで t 入声のみが中世末期まで生き延び、近世に入って失われた通時的な経緯を対象にしている。本稿は、先に述べた通り、位相の問題として、促音化、開音節化との併存関係を対象とする。

「別」字の t 入声は以下のように受容されている。

○促音化 例「別地」Becchi 等

→「別」の後がカ行、サ行、タ行、パ行

例外「別心」Bexxin の、見出し以外の記述（土井・森田・長南『邦訳日葡辞書』岩波書店 1980 凡例参照）に Betxin がある。

○t 入声保存 例「別」Bet、「別段」Betdan 等

→「別」の後が#（語末を示す。以下同じ）、ガ行、ザ行、ダ行、マ行、ヤ行、ラ行

例外「別勅」Betchocu（後がタ行）。

○開音節化 例「別々」BechiBechi、「別段」Bechidan 等

→「別」の後が#、ガ行、ザ行、ダ行

これを規則として帰納すると、後接子音が無声なら促音化、後に何も続かない環境すなわち語末か、後接子音が有声なら、t 入声保存またはチに開音節化となる。音声学的に期待通りの状況であり、口頭言語上の実態を基盤にしていると考えて良いであろう。たとえば「罰」も期待通りに Bassuru、Bat、Bachi の三つの形がでてくる。次に述べる通り、綴りの上で人工的な整備が施されているが、音声学的な仕組みから大きく逸脱するには至っていない。

二つの例外「別心」「別勅」については、「別」字を Bet と綴る意識の機械的適用かと解釈する。周知の通り、日葡辞書を含むキリシタン資料において、語の綴りが文字上で整備されている。後にあげる「念仏」には音声学的には期待に反する nenbut の綴りが与えられている。「念」は nen と綴る意識が確立していたのであろう。

さて、この結果を「仏」と比べて注目すべきは、「別」Bet、Bechi（語末）をはじめとして、かなりの数の語に、t 入声保存形とチに開音節化した形との両形が存在することである。

はじめにふれた通り、「別」は機能語としてはたらき得る語素である。口語的な文体の文脈で口頭にのぼせられる機会が多く、そのとき「別」を単独で発音すると開音節化する傾きがあったのではなかろうか。日葡辞書に掲載された語形は、当時それなりの一般性をもっていたもの、いわば認証語形、と考えて良いであろうが、その一部に口頭語に

おける開音節化が及びつつあった状況か。すでに指摘されている通り、たとえば Betguan の項の説明記述に Bechino negai とあるように、t 入声保存形の見出しに開音節形のよみによる説明の付けられている例がいくつかある。この動向がいくつかの見出し語にまで及んでいたと解釈する。

なお一言しておきたい。t 入声保存形とチに開音節化した形のうち、前者が標準形と意識されたとは限らない。たとえば、Bechidan の項には Betdan という方がまさるとあるが、Betji の項には Bechiji という方がまさるとある。前者のみを取り上げて t 入声保存形が標準形であったと受けとる向きがあるが、語形の規範意識と通時的な新旧とは別である。しかし、固有の日本語が開音節であることからして、漢語の t 入声保存が古形あるいは本来形と意識された可能性を想定するのがすなおであろう。

## 1-2. 日葡辞書の「仏」語彙

同じ手続きで「仏」語彙の t 入声受容を調査した結果を示す。

○促音化 例「仏閣」Buccacu 等

→「仏」の後がカ行、サ行、タ行、パ行

○t 入声保存 例「仏寺」Butji 等

→「仏」の後が#、ガ行、ザ行、ダ行、ナ行、マ行、ヤ行、ラ行、ワ行

例外「仏果」Butqua（後がカ行）が Bucqua と併存。両者の関連は記述なし。「仏知恵」Butchiye（後がタ行）。

○開音節化 例「仏事」Butçuji

→「仏」の後がザ行

この状態を規則としてみると、後接子音が無声なら促音化、語末か後接子音が有声なら一拍を保って t 入声保存または開音節化となり、「別」の場合と同じである。例外「仏果」「仏知恵」については But 綴りの機械的適用と解釈しておく。

しかし、「別」と見比べると、t 入声保存形とツに開音節化した形との併存は「仏事」の一例のみである点が注目される。これをすなおに解釈すれば、「仏」の t 入声は当時の口頭語でも保存される傾きが強かったことになる。

この要因は語彙的な問題であろうか。両形が併存する「仏事」は、Butçuji の項の記述が詳しく、Butji の項の記述に Butçuji に同じ、同条を見よとある。前者が先出なので記

述が詳しいのかもしれないが、標準形はむしろ開音節化した Butçuji であったと解釈したい。「とむらい」の意の語として口頭にのぼせられる機会が多かったのではなかろうか。

## 2. 天草版平家物語にあらわれる「別」「仏」を要素とする語

前節にみた日葡辞書の状態がキリシタン資料の一般的な状況であったと方法上で仮定しよう。そして、天草版平家物語の状態を、キリシタン資料のなかでの一つの文献の個性のあらわれと仮定しよう。あらわれる「別」「仏」を要素とする語彙のすべてを後接位置の環境別に整理して以下に示す。検索は近藤 1999 によった。

○後の子音が無声 「別して」 bexxite

「別当」 bettō

「仏閣」 buccacu

「仏法」 buppō

○後の子音がある 「別業」 betguiō

「仏事」 butji

「仏道」 butdō

「仏名」 butmiō

○語末 「別」 bet

「愛別」 aibet

「惣別」 sōbet

「段別」 tanbet

「念仏」 nenbut (309 頁 -11 行の 1 例のみ nembut)

この状態を規則として帰納すると、日葡辞書と同一の原理である。綴りが人為的に整備されていることも、先にふれた「念仏」の綴りから確認できる。音声学的に期待される nem- の綴りが一カ所にのみあらわれることによって、他の nen- 綴りが人為的であると裏付けられる。

しかし、日葡辞書と異なり、語末または後接子音が有聲の環境で、「別」は開音節化形があらわれず、専ら t 入声保存形があらわれる。日葡辞書では Bechino coto のように項目内の説明記述では開音節化形があらわれるが、天草版平家物語は bet no coto のように t 入声保存形になる。2 例の「仏事」も両形のうち開音節化形でなく t 入声保存形が

あらわれる。天草版平家物語は言語量が大きくないので、偶然に開音節化形があらわれなかった可能性も考慮しなくてはならない。しかし、編者が全体に開音節化形を採らなかったとみるのがすなおであろう。

これを、最初に述べたように、やや上品な口調で会衆に語りかける文体の一部をなす要素と解釈する。語りの芸能や演説の類は、語形、語彙、語法の選択にあたって通時的にやや古い形態をとる傾きがある。それは、聴衆に対する一種の待遇表現としての方略であり、同時に、語り手自身の品格保持のためである。

### 3. 平家正節にあらわれる「別」「仏」を要素とする語

前節末尾に述べた見解を裏付けるための一つの手続きとして、平家正節の t 入声の受容を調査する。天草版平家物語が平家物語諸本のうち何を下敷きにして成立したかは、本誌掲載の近藤政美による詳細な研究に依拠するとして、本稿では、当時も行われていた平曲の口調が天草版平家物語の文体に反映していることを推測する。その t 入声の状態は、語りの芸能における古形発声の一つであったろうと予想するのである。

平曲の語りの様子を伝えるのが平曲譜本であるが、現存する譜本は貞享四年（1687）書写の高橋氏旧蔵本が最古であり、それも断簡である。まとまった写本は 18 世紀後半以降のものに限られる。そのなかの最善本である尾崎家蔵の平家正節の墨譜（平家正節では「象<sup>しょう</sup>」）によって考察する。ほかに、富山県宮崎文庫記念館蔵の平家物語は、平家正節以前に行われていた平家吟譜の善本であり平家正節よりやや古態を反映していると推測されているが、その考察は今後の課題であり、本稿には導入することができない。

平家正節が成立した 18 世紀後半当時、t 入声は、口頭語では、無声子音の前では促音化、有声子音の前または語末なら開音節化していたと考えるのが穏当である。しかし、謡曲や平曲では t 入声を内破の発声で保存し、これを「のむ」と称していた。平家正節ではその発声を〔ノム〕〔ノ〕の書き入れで指示しているときがある（上野 2011 など参照）。

また、促音の形で発声することを平家正節では〔ツメ〕〔ツ〕の書き入れで示しているときがある。t 入声が無声子音の前で常に促音化していたのなら、音声学的には指示する必要がない。わざわざ指示するのは、語りの芸能としての発声法であろう。それは、〔ツメ〕が施されているのは漢字の入声音起源の語に限らないことによって裏付けられる。たとえば「清水炎上（口説）」の「此騒動の浅ましさに」の「し」に対する〔ツメ〕の書き入れは、和語に施された強度強調、「あさまっさ」のような発声の指示であると解

釈して良い。その前後の文脈には「上<sup>ㄣ</sup>」の象が多く施されている。「上<sup>ㄣ</sup>」の技巧は一種の強調表現とみてよからう。平曲の語りは平家物語の本文に対する音声上の解釈という一面をもつ。平家正節に反映している語りにおいて、この箇所<sup>1</sup>の文脈は何らかの強調表現を行うべきと解釈されていたのであろう。

さて、用例を環境別に整理すると以下ようになる。検出は上野 2000、2001 を利用したが、同索引の検出対象は口説、素声、折声、指声、シヲリ口説の曲節にあらわれる語に限られていて、悉皆調査ではない。そして、同索引は青州文庫本によっているので象が尾崎本と大きく異なり、本文も若干の相違がある。以下の一覧は尾崎本に即して検出しなおした状態である。その結果、青州文庫本では検出されない用例を一部に含んでいる。「書き入れなし」とは、象の有無でなく、〔ノム〕〔ノ〕〔ツメ〕〔ツ〕の有無をさす。項目の後の（ ）内に青州文庫本の対応個所の状態を示す。

#### ○後接する子音が無声

「別して」1 例書き入れなし。

「別所」8 例書き入れなし。（青州文庫本では8 例中1 例に〔ツメ〕、3 例に〔ツ〕）

「別当」29 例書き入れなし。（青州文庫本では1 例に〔ツメ〕、1 例に〔ツ〕）

「仏所」1 例書き入れなし。

「仏誓」1 例書き入れなし。（青州文庫本では〔ツメ〕）

「仏体」1 例書き入れなし。

「仏法」6 例書き入れなし。（青州文庫本では3 例に〔ツメ〕）

#### ○後接する子音が有声

「仏像」1 例書き入れなし。（青州文庫本では〔ノム〕）

「仏寺」1 例書き入れなし。（青州文庫本では〔ノム〕）

「仏事」4 例中2 例に〔ノム〕。（青州文庫本では他の1 例にも〔ノム〕）

「仏神」1 例〔ノム〕。（青州文庫本では〔ノム〕、「神」に濁点）

「仏前」2 例書き入れなし。

「仏陀」1 例書き入れなし。（青州文庫本では〔ノム〕）

「仏道」2 例書き入れなし。（青州文庫本では1 例に〔ノム〕）

「仏名」1 例書き入れなし。

#### ○語末

「別」7 例中の2 例に〔ノム〕。（青州文庫本では6 例中5 例に〔ノム〕）

「愛別」1 例書き入れなし。

「格別」 1 例書き入れなし。

「惣別」 1 例書き入れなし。(青州文庫本では〔ノム〕)

「段別」 1 例書き入れなし。(青州文庫本では〔ノム〕)

「仏」 2 例中 1 例に濁点と〔ノム<sub>カ</sub>〕、1 例に〔ノ〕。(青州文庫本ではともに〔ノム〕)

「諸仏」 3 例。1 例「一解脱」書き入れなし。(青州文庫本では〔ツメ〕)

1 例「一は」。(ツメ) と「は」に〔タ〕。(青州文庫本同じ)

1 例「一も」。(ノム)。(青州文庫本同じ)

「大仏」 4 例書き入れなし。(青州文庫本ではすべて〔ノム〕)

「念仏」 12 例中 1 例「一申し」。(ノム)。(青州文庫本では〔ノム〕なし)

1 例「一百篇」。(ツメ)。(青州文庫本は対応例なし)

1 例「一給ふ」。(ツメ)。(青州文庫本は対応例なし)

3 例「一を」。(ツメ) と「を」に〔ト〕。(青州文庫本は 1 例非対応)

「霊仏」 2 例「一霊社」。うち 1 例に〔ツメ〕。(青州文庫本ではともに〔ツメ〕)

この結果を帰納する。後接する子音が無声の場合は書き入れが施されていない。促音化するのが常であったので、とりたてて指示しなかったと解釈して良いであろう。青州文庫本の対応箇所いくつか〔ツメ〕〔ツ〕が施されているのは、この後に述べる通り、写本の性格によるもので、言語的には irrelevant とみる。

後接する子音が有聲の場合は少し説明が必要である。偶然に「仏」語彙にしか存在しないが、そのうち 3 例に〔ノム〕が施されている。音声学的には中世末期にこの環境で t 入声保存形であったことと矛盾しない。しかし、書き入れのない他の例が「のむ」の発声だったのかブツと開音節化したのか、それを知るすべはない。「仏事」は、先に述べた通り、日葡辞書において当時の日常語では開音節化したブツジの語形が標準的だった疑いがあり、天草版平家物語ではそれを避けて t 入声保存形を選択したふしがある。このことは「のむ」の発声が marked であった可能性を示唆する。青州文庫本の対応箇所には多く〔ノム〕が施されていることを重視すれば、平曲ではいつも内破形「のむ」で発声されていたという解釈も生ずるが、写本の性格によるという解釈をとりたい。青州文庫本は語りの発声指示を懇切に加える傾向がある。たとえば尾崎本では 4 拍の語に「上上上」の象が施されているところ、青州文庫では無譜を示す「・」を書き加えて 3 拍に読み誤るのを防止するような配慮が全体に行われている。いわばルビを豊富に施したような性格の写本であるから、それをもって、平家正節成立当時の平曲においてこの環境で必ず内破形で発声されていたとは考えない方がよい。はたして、尾崎本の 4 例の〔ノ

ム]は特定の箇所では「のむ」指示か、それとも一般に「のむ」なかの一部にのみ象を施したのか。その解は、語末の用例を観察して得られるであろう。

語末の環境にたつ用例の状態は興味深い。まず、「別」語彙に対して書き入れが少なく、「仏」語彙にはいくつかあるのは、日葡辞書において観察された、語としての性格の違いからくる相違に矛盾しない。

「別」に対する二カ所の〔ノム〕指示は「土佐守被斬」のひと続きの文脈にあらわれる。「判官、いかに土佐坊、鎌倉殿よりの御ふみはなきかと問給へば」をうけて「別の御事も候はぬ間……当時都に別の子細も候はぬは……」と土佐坊が答える場面である。一種の役割表現として、登場人物の会話の古風な言葉遣いを表現するために「のむ」発声が指示されたと解釈できる。

「仏」語彙の末尾のt入声の位置の発声は、以下の通り、尾崎本の発声法指示において特別な扱いをうけていると言える。

単独の「仏」としてあげた例は、一つは仏典からの引用「説我得仏」、もう一つは「仏、菩薩」である。これに〔ノム〕が施されているのは、キーワードとしてそのように発声する指示であったと理解できる。助詞「も」の前の「諸仏」と動詞「申し」の前の「念仏」に〔ノム〕が施されたのも同様に理解しておく。〔ツメ〕の書き入れが施された例のうち、「諸仏」「念仏」の例は、助詞へ続く「は→タ」「を→ト」の連声の前で促音化することの指示であり、音声学的に問題ない。

問題になるのは「靈社」の前の「靈仏」に〔ツメ〕の書き入れが施されていることである。有声の子音が後接する環境での促音化ということになり、音声学的には不自然である。「百篇」の前の「念仏」にも〔ツメ〕の書き入れが施されているところからみて、これらは四字を臨時一語的な漢語として扱い、そのなかの二字目の位置の「仏」を〔ツメ〕で発声するように指示したと理解するのが良いであろう。青州文庫本で「解脱」の前の「諸仏」に〔ツメ〕の書き入れがあることも参照できる。

こうしてみると、尾崎本の平家正節において〔ノム〕〔ツメ〕の書き入れが施されている箇所は、口頭語における日常の音韻とは別の、語りの芸能における「のむ」「つめる」発声を指示していると理解するのが妥当である。無声の子音の前では促音化するのが常であるから何も指示せず、キーワードとして語形を際立たせるとき、あるいは、連声や臨時一語の環境の発声において、口頭語と異なる促音や内破の形を要請する位置にのみ書き入れを施したと解釈できる。おそらく、当時の口頭語においては、有声の子音の前あるいは語末の環境では開音節化していたであろうし、平曲においても、とくに指示されなければ開音節化して発声されたのであろう。



#### 4. 今井檢校の現行の語りでは

参考として、今井檢校勉による現行の語りをみる。検出は『「平家正節」盲人伝承八句～ライブ映像と検索～』（科研費基盤研究（S）「戦に関わる文字文化と文物の総合的研究」研究成果報告書 2009 代表：遠山一郎）によった。伝承されているのが八句に限られるので、前節にあげた諸例のうちわずかな実例が得られる。

「別」語彙のうち「別当」（「鱸（拾）」）「別して」（「鱸（折声）」）「那須与市（三重甲）」は、いずれも通常の促音で発声している。「竹生島詣（折声）」の「妙音弁才天の名は格別なり」の「別」は「のむ」で発声。そして、この部分の出だしの「大弁功德天は」の「は」を連声ナで発声している。この「格別」は、日葡辞書で開音節化形でなく t 入声形 -bet の綴りであった。

「仏」語彙は、「横笛（折声）」にあらわれる「念仏の障碍<sup>しょうげ</sup>は候らはねども」の「念仏」は「のむ」で発声、「卒頭婆流（三重甲）」の「もろもろの神明仏陀の詠吟に依て」の「仏陀」も「のむ」で発声。そして、この部分に先立つ「住吉の明神は」「三輪の明神は」の「は」を連声ナで発声している。

ここにみたところは、前節で観察した平家正節の状況の範囲におさまる。そして、連声などの特殊な発声を行う文脈のなかで「のむ」が行なわれると解釈できる。

さらに、次のことも指摘できる。「那須与市」の扇的を射貫いた場面の擬声語「ひいふつと（上音）」の「つ」には平家正節で「張り」の象が施されているが、今井檢校はこれを「のむ」で発声する。芸能としての工夫であろう。促音で発声すると聞き取れない音になる可能性があるので、納得の行く措置である。そして今井檢校はこの工夫を先代から受け継いだとみられる。昭和時代の三檢校の残した録音でもこの箇所は「のむ」で発声されているのである。それに対して、館山甲午氏の残した録音は、象に従ったのか、促音で発声されている。

このように、語りの芸では音楽的な表現として口頭語では失われた古形を発声するときがある。それでは、遡って考え、天草版平家物語の t 入声形も当時すでに口頭語では保存されておらず、芸能として古形を発声したもののかと言えば、そうではあるまい。日葡辞書において t 入声保存形が優勢であり、他の同時代資料においても t 入声の発声が行われていたと考えるのが自然な状況である。たとえば捷解新語は外国人が観察した 17 世紀日本語を伝えているが、語末の t 入声を保存する形のハングル表記は巻十の八例に限られ、他の巻には「分別」をはじめ開音節化した形の例が多くみられる。森田武 1973 によれば「書簡文を読む場合など、改まった言い方などには、入声の発音が保たれ

ていても、一般には開音節のツに発音されることの多かったことを示す」状態である。  
やはり、天草版平家物語の t 入声は、上品な語り口を表現するために、あり得る発音の  
なかでより古い語形を選択したと考えるのが穏当である。

### 参照文献

- 森田武 1973 「捷解新語解題」『三本對照捷解新語釋文・索引・解題篇』京都大学国文学会  
柳田征司 1993 『室町時代語からみた日本語音韻史の研究』第二章 武蔵野書院  
近藤政美 1999 「天草本『平家物語』の翻字に関する諸問題」『天草本平家物語語彙用例総  
索引』勉誠出版 解説 I  
上野和昭 2000 『平家正節 声譜付語彙索引 上』（アクセント史資料索引 十五）  
上野和昭 2001 『平家正節 声譜付語彙索引 下』（アクセント史資料索引 十八）  
上野和昭 2011 「平曲譜本の国語学的特色」『DVD 版尾崎家本平家正節解説』平成 22 年  
度文化庁芸術団体人材育成支援事業成果報告書